九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「遠藤周作」の審級（2）：フロイト・ユング理論との照合

山下，静香
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年

https://doi.org/10.15017/8451

出版情報：九大日文. 2, pp.157-166, 2003-02-28. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

「遠藤周作」の審級（2）

―フロイト・ユング理論との照合―

山下 静香（YAMASHITA Shizuka）

＊はじめに

前回、「スキャンダル」における「無意識」という用語の「私の物語」における使用法について、精神分析学的な使われ方と作品内部での用いられ方の違いについて確認した[1]。簡単に述べれば、「無意識」という用語を「私の物語」に断定し導入の糸口を提供できる唯一の者である「精神分析医」という存在の専門性に対し、勝呂の場合は、「自分」で「自分の無意識」を「夢そのもの」として発見し「私の物語」に導入するという、その専門性の欠如が認められ、両者の間には決定的な距離があることが確認できた。そう考えてみれば、「精神分析学」における「無意識」と「スキャンダル」作品内部における「無意識」はレベルを異にする語としてあり、それらを同列の次元に並べて問題化することは不可能なのではないかという気がする。だが、例えばロレンスが〈無意識は決して抽象物ではなく、けっして抽象されえぬものである。それはけっして観念的な存在ではない。それはつねに具体的である〉[2]と言ったことなどを思い起こしてみたり、両者がともに「無意識」というシニフィアンのレベルにあるものとして捉えてみる視点を導入したとき、その思いは一歩立ち止まるべき姿を私たちにみせる。レベルが違うからといっただけでは済まされない「言葉」の亡霊が私たちを襲う。「無意識」という語の持つ力は「専門性」のみにあるわけではない。具体的に言えば、既に「私の物語」として獲得した状態で語られる成瀬美津子・糸井素子らにまつわる「無意識」という語の使われ方や自ら獲得した勝呂の場合のそれも「無意識」の流通のひとつの形態として捉え、「精神分析」的な「無意識」の意味内容を視野にいれながら、それが「スキャンダル」における「私の物語」にどのような影響を与えていくのかを検証していく作業が待っている。そうして見ていくことにより、「精神分析」的な用語と「スキャンダル」という文学作品における「無意識」の使われ方の差異がより明らかになるかとおもわれる。

＊「性は自分でも気づかない心の奥の秘密をみせますもの」（成瀬）

精神分析理論を特殊なものにしているのは、それが探求分野を欲望の意味論に限定していることである。この意味で、理論は人間についての精神分析的観点を決定する、換言すれば、開くと同時の範囲を確定するのである。このことで私が言おうするのは、精神分析理論の機能は、欲望の領域に解釈の作業を位置づけることだ、ということである。[3]

精神分析が可能にする患者の「私の物語」の因果律の回復は「欲望の意味論」というパイのなかにある旨が述べられている。言うまでもなく、勝呂の「私」もミツとの性行為の欲望がどこにあるのかの探求の末に獲得されたものである。まず、こうした欲望がどのような「勝呂」の「私の物語」としてあるのかをフロイト・ユングの場合とともに考えてみたい。

「欲望」ハ何故ニ単ナル欲望デハナラナイノカ。ソコニ意味ヲ見出スノハナゼナノカ。

ちょっと休憩して、仮にこう問いを立ててみる。それは世界に安定を獲得するためだとも、主体が「正常に」成立するためだとも

言える。例えば、「私がここにいるのは、神様のおぼしめしです」も「私がここにいるのはお父さんとお母さんの夜の営みの結果です」も「私がここにいるのはコウノトリが運んできた結果です」も「私がここにいるのはなんでだろう」という問いに対するひとつひとつの答え方である。だが、私たちはこれらの答える術を獲得してもなお、「なんでここに私はいるのだろう」という問いを完全に停止することは出来ない。それに対する「嫌疑」は解消しつくされない。それと同じことが精神分析が意味づけていく「私という現象」＝「欲望」についても言える。私たちが「私」を獲得するためには、つねに「私」を物語化せねばならぬのなら、また私たちが常に自分の姿を監視するまなざしのなかで行動しているとするならば、私たちは常にその行動に対する意味を見出すことを、「私」という現象を獲得するうえで内在的に要請されている。さて、もう一度「精神分析」という場合に戻って上述のことを鑑みると、「欲望の意味論」に限定された「私の欲望」の解釈学として、どのような「私」の範囲（要素と全体化）が限定されてくるのか、ということをまず確認し、その後それが決定的な欲望の「意味」であるのか否か。もし決定的であるとするならば、それはどのような力学のなかで可能とされているのかということを検証していきつつ、最後に「スキャンダル」という場に立ち戻って「私の物語」における「欲望」としての「無意識」について考えてみたい。

（「私」の欲望、「みんな」の欲望　～結局「誰」の欲望なの？～）

周知の通り、フロイトの「意識・前意識・無意識」という三層構造に対して、ユングは更なる下層として「集合的無意識」を措定した。「私の物語」を構成する際、このどちらに「私」のキモを置くのかで、「私」という現象の立ち表れ方[4]には差異が生じる。

フロイトの場合であれば、その「無意識」はユングをして〈意識の付随物にすぎず、そこには意識と両立しないものがぜんぶ押し込められている〉[5]といわしめるような代物である。言い換えれば、患者の生活史を掘り起こし、ある原因が無意識下に埋没していることを発掘してやることを目的としている[6]。そしてその発掘された原因は「無意識」という「欲望」であり、そのときに「私」という主語も同時に獲得する[7]。そうした土台の上にフロイトの解釈作業は「還元解釈法」[8]でありかつ「多元決定」[9]として「私」が生成される。つまり、例えば「顕在夢」の夢語りを聞き出した分析医が、治癒を目的としてその象徴としての「顕在夢」を、患者という「私」の人生における物語の中にあって必ずや思い出し容認されるべき「過去の忘れたい嫌な出来事」の表れとして解釈していくとき、それが「私」と成るのある。同時に、「過去の忘れたい嫌な出来事」は、（あくまで比喩として）オイディプス神話における近親相姦が、「したいけどできない」（という筋の）「私の物語」における「私」の欲望の表れとして肉付けされることとなる。

前置きが長くなったが、フロイトの場合は「無意識」の措定条件・解釈方法からして常に患者の私の欲望として「無意識」が語られることになる。それに対してユングの場合は「集合的」という名づけ・レトリックからして「私」という個別性は薄れる。その違いが具体的に現れているのはユングの以下の言及であろう。

この因果づけは個人的である。私はこの構図がレオナルド以外にも見られるという事実や、また聖アンナはキリストの祖

母であって、フロイトの解釈が要求するような母ではないという小さな矛盾にこだわるつもりはない。むしろ私が強調したいのは、一見個人的な真理に、他の分野ではよく知られている非個人的なモチーフが絡まり合っているということである。そのモチーフとは二人の母というモチーフであり、これは元型の一つであって、神話学や比較宗教学の領域にいろいろな形で現われ、また多くの「集団表象」の基礎になっているのである。[10]（筆者注、傍線は筆者による）

これはフロイトが同じ「処女マリアと幼な子キリストともある聖アンナ」という絵について〈レオナルド自身が二人の母を持っていた〉[11]ことからこの絵を解釈していることに対する反駁である。そもそもユングの集合的無意識という「存在」は元型を探し当てることにより可視化される[12]。

またユングは神経症というフロイトと同じ出発点にわざわざ立って、個人史的次元からだけでは原因を探し当てることの意味がなく〈大多数の個々人に神経症を起こしやすい危険な状況になっている場合には、元型が布置されていると仮定しなければならない〉[13]としていたり、〈もし詩人たちに集合的無意識を読み取る力がなければ、誰もふり向きはしない〉[14]などとも言う。時代や状況において似ている現象の原因は全部集合的無意識という言葉で原因づけられていく。つまり、先のダ・ヴィンチの例に戻って言うのなら、フロイトが自分の名のもとにダ・ヴィンチがあの絵を書いたときの心理の原因をダ・ヴィンチの幼年期の体験として確定するのに対し、ユングの場合は、「私たち」が問題になる。フロイトが彼／ダ・ヴィンチの「絵」を使ってダ・ヴィンチの「無意識」を探ったのとは別の、「われわれ」の「二元型（無意識）」が、ダ・ヴィンチの「絵」を起因として説明されることになる。

以上のことを踏まえて作品に戻ってみたい。「スキャンダル」における勝呂の「無意識」を媒介させた「私の物語」は、勝呂の個人史（ミツとのセクシャルな夢）を辿り、それが成瀬の「人間誰にでもあるもの」という成瀬の言葉により一般化されるという特徴をもっている。つまり、個人史でありながら常に固有名のもとに一般化されるという構図になっているのである。もちろんユングの場合であっても、治療の場では患者何某（この言い方はちょっとおかしいですが）さんに向かって「無意識」を発動させるわけだから、個別性と一般性というのはごちゃ混ぜになるのであろうけれども、例えば先のダ・ヴィンチの絵の説明などを例とすれば、「人類（我々）」の「集合的無意識」が語られることになる。だが、「スキャンダル」の場合は、誰にでもある欲望として勝呂の「私の物語」のなかの「欲望」のみが一般化されることに目を留めたい。ユングは元型という概念を使って「宗教的な言説」や「神話」において寓話化されたモチーフを再び寓話化しなおす。個人史とは別のくくり（文脈）で再物語化し、一般化していく。この部分に違いがみられる。つまり、勝呂の場合の欲望は寓話化されていく次元が違う。そこにある「欲望」は、ミツのパンティだけの姿を慾情的にみたという「夢」[15]が表すあくまでも勝呂の「欲望」として語られる。勿論、ユングが措定した元型の中にはフロイトが提唱するような「性欲」はない。「スキャンダル」をフロイト・ユング理論との対置のなかで読もうとするとき、そこにある「欲望」は「人間誰にでもあるもの」とされる性欲である。それが「スキャンダル」においてどのように物語化されているのかを問うてみたい。だが、そうしたレトリックの問題に入る前にまず、原理と

して「性欲」がどのように作品中で機能しているかということを明らかにしておこう。

また、少しでも「遠藤周作」と冠のついた著作に触れたことがある読者であるのなら「性欲論三篇」でフロイトが人間の本能として説いた「幼児性欲」について、遠藤が「納得いかない」と述べていたことは、今更繰り返し述べずとも思い起こされるであろう[16]。このことを背景にしてみると、なぜに受け入れがたいと言った「性欲」というモチーフばかりを用いて、作品内の「無意識」を彩ったのかが、気にかかる。そうした疑問も含めて、どうしてなのかを問うために、フロイトの場合における性欲の扱い方と、作品内部のそれがどのように違っており、それがそれぞれの「私」を形作る際に、どのような影響を及ぼしているのかを検討していきたい。

＊「本能」や「原理」としての「無意識」について

さて、これまでの考察において作品内部での「無意識」という語の使われ方は、「勝呂」個人を指しながら、同時に《性は当人も気づかない、一番の秘密を顕す》[17]などといった語り口は「人間」という括りで勝呂を名指していくという風にまとめることが可能である。そうした人間としての本能とされる要因が、どのように登場人物の「私」として彩られるのかを検証する。具体的には成瀬美津子が人間誰にでもあるという「死の快感」や「性は人間の本性を現す」と言うことと対応させて「死の本能」「性の本能」、勝呂が東野にサディズムについて問うたことに関連させて「サディズム」について照合していきたい。なお、これら三者はフロイト理論のなかでも作品内部でもお互い関連しあいながら、体系立てられたり物語られている。よって所々重複したりスライドしながら論証していくことになるかと思われる。

（「死の本能」「性の本能」「サディズムとマゾヒズム」）

①「死の本能」について

ここで名指した「死の本能」とは、作中において成瀬美津子や糸井素子、石黒比奈、S氏が提唱する「死の快感」のことである。これは《醜の美学》[18]という概念とともに、《堕ちていく悦び》[19]として捉えられ、具体的にはセックスをしながらその恍惚の中で死にたいと思う願望として語られている。そしてこの願望は「クリスチャン」である勝呂に《先生にだってわかるでしょう》と成瀬から同調を呼びかけられる。このような「死」への構えは、フロイトの「死の本能」と影響関係を見出すことが出来るので、それとの照合を試みる。

結論を先走れば、「片手落ち」、この一言につきる。では、具体的に検証しよう。まず第一点として〈思弁〉であるとされた「死の本能」が作中では「誰にでもある欲望」として成瀬等に語られていることには注視せねばならない。そしてもう一点としては「死の本能」がフロイトにおいては〈エロスとタナトス〉として語られていることである。つまり、「生きる本能」としてのエロスと「死の本能」としてのタナトスは「快感原則の彼岸」において両方あってこその「彼岸」として設定されているということだ。このことについての矢作の以下の言及は示唆的である。

生とその彼岸の関係は有機体と無機体の関係としてとらえるべきではなかったと言える。つまり、まず無機的世界の静止状態があり、そこから生命が誕生し、やがて死が訪れて無機

的世界へと分解するという諸段階である。フロイトにとっても死の本能は彼岸として発見されていたため、生命の活動の中で機能し、快感原則という傾向を生み出し、生命をその快感原則の従わせる原理として、超越論的な地点で立てられたものである。そうした意味で、死の本能は確かに生命のより深い層に関わるはずのものなのだが、最終的には、時間の表象、無機体から有機体という順序、そしてその始まりと終わりのループを結ぶ機能にしてしまった。[20]

フロイトが小胞モデルという比喩を使って快感原則の彼岸を説明したことは今更述べ立てるまでもないことだろう。だが注意したいのは、言うなれば、このレトリックを採用したこと自体からしてもエロスとタナトスを両者合わせてしか機能しない原理としたということである。言い換えれば、〈有機体から無機体〉へという時間の表象が原理に張り付くとき、そこにはお互いがお互いを作動させるものとしてしか成り立たないものとして「エロスとタナトス」はあったということだ。

ここでもう一度立ち止まりたい。作品中で成瀬は「死の快感」として「死」を語る。ただただ「死んでいくことに快感がある」として語る。そのことを一番物語っているのは糸井素子の自殺であろう。そして作中においては「本能」という言葉ではなく「快感」として翻訳されていることにも留意せねばなるまい。「死の本能」と「生の本能」は、原理として両者一対してしか成り立たないものであったというのであれば、勿論、糸井素子が快感のなかで死んでいったとされることも、生をより鮮やかなものとして対比させるための死だったという説明も可能であり、それは死によって逆説的に生を物語ったこととなり、この両者（「死」と「生」）は二項定立していると言える。さらに言えば、フロイトが（被分析者が「わたしはそうは思いませんでした」とか「わたしは（絶対に）それについて考えませんでした」と反応した場合ほど、無意識的なものが発見されたことをはっきりと証明する）[21]という解釈の仕方を提示していることを考えれば、勝呂にとっての「私」についても「死の快感」という言葉が物語内における勝呂の生に意味を持ったものとしてあるということを指す。

だが、先述したように「片手落ち」という判断を下したのは、作中におけるそのような「死」のあり方からだけではない。その理由は「エロス」の語られ方にある。ここで「エロス」と言ったのは、先に述べたように「生の本能」のことであるが、原理としては「性欲動」のことである。つまり「性」についての語られ方が、作中において生命の維持を求めるものとして語られていないことからの結論である。そこで、少し論証が先送りになるが、「性本能」についての視点に移りたい。

②「性本能」について

フロイトは著書「自我とエス」において「快感原則の彼岸」で「本能」について述べたことを指し〈本能には二種類は区別されなければならない。その一つは、性本能あるいはエロスで、（略）それは、阻止されない本来の性本能と、そこからみちびかれ目標を阻止され昇華された本能を含むだけでなく、自己保存本能も含む〉[22]としている。言い換えれば、「エロス」の方の本能は、「タナトス（死の本能）」とは全く反対の「自己保存」という目標に向かう本能としてあるのである。

さて、ここでやっと「スキャンダル」における「死の快感」について考察することと縒り合わせることになるのだが、「スキャン

ダル」の場合について少し説明を加えておきたい。成瀬が「死の快感」についての説明を聞くようなこと、更に東野から「子宮回帰願望」についての話を聞くということについて考えておく。この二つを「性」という言葉をキーワードとして並べるのは、作品の舞台が「東京」対「長崎」＝「成瀬美津子との世界」対「妻との世界」という構図になっているなか、エア・ポケット的な場所として仕事場が設定されており、その仕事場が《子宮願望に安心感を与える部屋》[23]として語られていることによる。そうした意味の連鎖を見出すとき「性理論」との絡みで説明せねばならぬと考える。以下引用に挙げるように、作中における「死の快感」と「子宮回帰願望」は、「性」をキーワードとして語られているからである。

どうしてかな。高校生の時、わたし醜い男から犯された場面を夢に見たことがあるの。夢からさめて、嫌じゃなかったわ。むしろ、ぞくぞくしたの。あの時も先生に押さえつけられ、唾だらけにされ、最後に頸しめられた時、すごく感じちゃって……このまま死んでもいい快感があった。あれは先生の体が醜かったよ。[24]

「死の快感」は《醜い》ものに抱かれ、その腕のなかで死ぬことを夢みる。そしてこの《醜い》ものとは、言うまでもなく勝呂の老体を指す。つまり生物学的（幻想）に言ってより死に近い存在を志向している。そして一緒に「子宮回帰願望」も見ておきたい。

M氏は、子宮回帰の願望とは母の胎内で生命がまだ動き始めていない状態――つまり羊水のなかで眠っていた状態に戻ろうとするひそやかな願望だと説明してくれた。それは別の形でいえば生の慾求というより永遠の眠りや死の慾望とも言えるのかもしれぬ。[25]

ここで「子宮回帰願望」は《死の慾望》として言い換えられている。そしてまた作中においても、この写真家M氏によって語られたとされる「子宮回帰願望」は東野の次の語りと重ね合わせると精神分析的な観点からの慾望として読むことができる。

子宮を出る時の恐怖はすさまじいもので、それは赤ん坊の心の奥に残るのです。決して消えはしない。彼が成長しても無意識の層のなかに含まれます。それが死の不安にも結びつくし、また逆にふたたび羊水に戻りたい、胎児に戻りたいという烈しい願望にもなります。マゾヒズムは、あるいはふたたび羊水にいた状態で生きたいという願いが変形したものかもしれません。[26]

マゾヒズムはフロイトが性倒錯者の行動を説明するのに用いた言葉である。自分を傷つけるような性癖を持った人を名指した言葉である。そして《羊水に戻る》ことは誕生以後の生のあり方を否定することである。すると、この場合もやはりその目標は「死」にあると言える。先に確認したように、「性の本能」という言葉で名指される意味内容のポイントは「生きるための欲動」にある。筆者も何もセックスやマゾヒズムのような性癖の一パターンが、絶対に「生きるための欲動」にならぬとは言わない。だが、上記引用の三つの語り方には、「死」という状態へ入るための契機としての「性」しか語られない。そうした意味で、筆者は「片手落ち」と断言したのである。

以上のように作品中においては「死」への入り口としてのみ語られる「性」であるが、もう一歩作品に寄り添って考えねばならないのは、その死が「快感」として意味づけられている点であろ

う。では最後に、「スキャンダル」における「死の快感」について更に考えるためにサディズムについて確認しておく。

③サディズムについて

フロイトは性倒錯者の行動を説明するためにサディズム・マゾヒズムという傾向を人間一般に認めることになるのだが、〈非常に多くの人間の性的体質のうちには、攻撃的・サディズム的要素の正反対物への転化によって生じたマゾキズム的要素が存在している〉[27]とする。フロイトのこの説明の仕方を見てほしい。人間の心や性質を科学する医者であるフロイトが、人間に本質として備わっている要素として、より多くの人間の「本能」として認めたのはマゾキズムという要素である。だが、「死の本能」ということを視野に入れると、「サディズム」が重要になる。フロイトは〈結局われわれは、サディズムをその（筆者注、死の本能の）代表的なものとみなすことになった〉[28]と言う。このような「死の本能」と「サディズム」という関係性を考えれば、「死の快感」について成瀬に説明を受けた勝呂が、東野に〈するとサディズムは……〉[29]と質問したことに説明がつく。（別により一般化された方を採用する必然性もないし…）。そしてまた、留意せねばならないのはマゾキズムとサディズムも表裏一体[30]であるという点だ。「エロスとタナトス」同様、二つで一つとして設定されている。そうであれば、片方だけが強調されるのは何故なのかという疑問が湧く。今回考えたことで言えるのは、「性」が「子宮回帰」として誰かの身体の中へ移行するイメージ。サディズムという相手へ志向するベクトルを強調する「本能」について強調していることである。前節の小題のタイトルとしたように成瀬によって《心の奥の秘密》[31]とされる「無意識」が常に相手と自分という二つの「無意識」として並列に使用されていることが確認できる。

（でもあくまで「勝呂」であるということ）

そして更に言えば、「本能」と「（勝呂という）私（という現象）」は違う。フロイトは以下のようにも言う。〈生命それ自体は、この二つの傾向（筆者注、生の本能と死の本能）の闘争であり妥協なのであろう〉[32]。つまり、勝呂が贋者を認めた時点で、原理としては「成瀬美津子との世界」＝「東京という場所」＝「死の本能」などを「私」として獲得したとしても、フロイト的に言えば、それはあくまでも一要素としての「本能」でしかない。これと両輪をなすものとして作中で設定されている「妻との世界」における例えば「クリスチャンとしての勝呂」は、それら「本能」としての「私」の要素を獲得した後にどのようなものとしてあるのだろうか。と言ってみたところで、前述したように「本能」という要素ではなく「快感」という言葉で「私」の物語に取り込まれているため、精神分析医が欲望の意味論のパズルをクリアしてやらなくとも、自分たちでそれを前景化して語ることが出来るのと同様に、ただただ覗き穴から見たミツとの光景が「私」としてライトアップされていくのである。

また作中において「死の快感」として本能が語られたとき、「本能」ではなく、ある「私」が働きかけることによって得られるものへと変容している。勿論深層心理学者・東野の口から語られたことは、人間の本能とか要因という言葉で名指されるようなものとしてあるかもしれないが、成瀬や素子、比奈によって語られる「死の快感」は、そもそもあるような「本能」として捉える必然性もどこにもない。「快感」として呼ばれたとき、自分の内部にあるものというよりも、ただひたすらそれを欲するという「対象」

へと変わっている。無論リビドー価が上昇し昇華が行われるときには何らかの「対象」が見出されていなければならない。その意味でなら「無意識」が対象化されていることになる。だが、作中では、物語ることの最初から「死の快感」として対象化された「死」とはそうした欲動が私たちのなかに内在化しているのかどうかということを問うことなしに対象化され、昇華行為と認定されることもなく「対象」としてそこにあることを認めることが要請されている。

つまり、「死の本能」や「性本能」の場合と照合した結果、フロイト理論からすれば「片手落ち」として原理化された「スキャンダル」内における人間の原理は、「死」が「快感」として語られること＝私たちにそもそもある欲望として語られることにより、それが勝呂のすべてであるかのような「私」と成っているのである。

＊おわりに

ここまで照合してきたが、最終的に今回論証できたことを言えば、「精神分析の理論」だけではこの小説で語られる人間は読めない、ということだ。もう少し具体的に言えば、「私」という一人の人間の確定の仕方も違えば、人間を意味づけたその語りの有り様という二段階に分けた精神分析からの観点、その双方ともについて、精神分析の説明システムでは説明のつかない部分を多分に含有した「私」として勝呂はあったということだ。そして、いままで筆者が強調してきたことは、いかに違うか、ということを確認するための作業となった。再度強調すれば、小説なのだから精神分析の理論をそっくりそのまま使わねばならぬ義理も人情もなくてよい。だから、違っても当たり前だ。この当たり前のことをどのように違うかということを確認してきた。

以上のように理論的な部分として相違点が確認できたところで、では、このような「私」の物語のあり方がどのような「私」の物語として享受されていったのかという問いに視座を移したい。簡単に言えば、一九八〇年代に一世を風靡した『心理ゲーム』という場における「私の物語」の獲得の仕方を確認していきながら、一九八三年に出版されたこの小説を読むことを考えていきたい。そうした視座を踏まえた上で、今回少しだけふれた、「遠藤」が「無意識」をどのように「寓話化」したのかという問題にも踏み込めるかと思われる。

【注記】

1 拙稿「「遠藤周作」の審級（1）―「精神分析」的な「私」との距離・「勝呂」の獲得の仕方―」『九大日文01』二〇〇二・七・二五

2 D・Hロレンス　小川和夫訳　「精神分析と無意識」『D・Hロレンス紀行・評論選集　5』南雲堂一九八七・九　七〇頁。「無意識」的な振る舞い――例えば、サディズムやマゾヒズムなど――は、その行為が対象化されてそう名指されるという意味において、とても「観念的な経験」である。だがそれが「自然な」振る舞いとして見えてきたり、あるひとつの「性質」や「癖」のような意識ではどうしようもないものとして、捉えられるという場合も否定することはできない。そうした場合を指しての「観念的な存在ではない」と言える場合を筆者は想定している。

3 ポール・リクール　久米博訳　『フロイトを読む』弘文堂一九八二・三　四〇八頁

4 筆者は鷲田清一のいう〈わたしの存在が名前を失う位相がまず問題とな

る。次いで、わたしと、身体という「わたしよりももっと古いわたし」との関係が問題とされる〉（『人称と行為』昭和堂一九九五・二　i頁）という問題系を想定している。

5 C・Gユング　松代洋一訳「ヨーガと西洋」『現在と未来』平凡社ライブラリー一九九六・一一　一八〇頁

6 例えば症例の記述に先立って〈この患者の生活史を純粋に歴史的にだけ記述することも、実際に必要な部分だけを実用的に記述することも許されないし、だからといって、分析治療の経過や病歴だけを報告するわけにもいかない〉（S・フロイト小此木啓吾訳「ある幼児期神経症の病例より」『フロイド選集　16』日本教文社一九六九・一二　二三二頁）〈本患者の幼児時代の環境を描写し、その幼児期の歴史について抵抗なく明らかにされたもの、長い年月を経ていてそれ以上完全に理解されることも明確化されることも難しかったものをあわせて報告する〉（二三二頁）とされていることに留意したい。

7 リクールが〈談話療法〉を〈ことばにおいて主語を構成することと、相互主観性において欲望を構成すること〉（『フロイトを読む』四一二頁）と指摘していることなどを参照。

8 久米博『象徴の解釈学』新曜社一九八七・七　二六頁、五三～五四頁など参照。〈幻影を縮減し、象徴を単なる付帯現象、結果、上部構造にすぎなくしてしまうもの〉（二六頁）として精神分析を例に挙げている。筆者は象徴の解釈をエディプス・コンプレックスという物語の筋に還元していく解釈法として捉えている。

9 エルマー・ホーレンシュタイン　村井則夫訳　「生、そして夢：多元決定されたもの」『現代思想』青土社　二〇〇〇年四月号所収を参照。〈夢の［明白な］要素が［潜在的な］夢の思考によって多義的に規定されているだけでなく、個々の夢の思考もまた、夢の中ではいくつかの要素によって表されている。夢の一つの要素からは、いくつかの夢の要素へと繋がっているのだ〉（一九四頁）

10 C・Gユング　林道義訳『元型論』紀伊国屋書店一九八二・六　一五頁

11 C・Gユング『元型論』一五頁。ユングの言及では『レオナルド・ダ・ヴィンチの芸術論』を参照したとなっているが、邦訳名が違うのか聖アンナの絵についての解釈は「レオナルド・ダー・ヴィンチの幼年期の一記憶」（S・フロイト高橋義孝訳『フロイド選集　7巻』日本教文社　一九五三・八）しか今のところ確認できていない。仮にそれを参照すると、〈レオナルドの幼年時代は実際にこの絵（口絵）のように奇妙なものであつた。彼は二人の母をもつていたのである。（略）自分を入れて三人の聖アンナの構図が彼の裡に形づくられたのである。〉（九五～九六頁）というようにダ・ヴィンチの絵を彼の無意識の表れとして捉えそれを彼の幼年期の状況として解釈しているのか確認できる。

12 C・Gユング『元型論』二二～二三頁

13 C・Gユング『元型論』二〇頁

14 C・Gユング　佐藤正樹訳『心理学的類型Ⅰ』人文書院一九八六・五　二三一頁

15 遠藤周作「スキャンダル」『遠藤周作文学全集　四』新潮社一九九九・八　二八頁

16 「ひとつの小説ができるまでの忘備ノート」『三田文學』二〇〇一年秋号慶應義塾大学　二〇〇〇・一一

17 遠藤周作「スキャンダル」三五頁

18 遠藤周作「スキャンダル」三三頁

19 遠藤周作「スキャンダル」五一頁

20 矢作征男「共犯者たち」『現代思想　特集心理学への招待』青土社二〇〇〇・四月号　二七三頁

21 S・フロイト　中山元訳「否定」『自我論集』ちくま学芸文庫一九九六・六　三〇一頁
22 S・フロイト　井村恒郎・小此木啓吾訳「自我とエス」『フロイト著作集　第六巻』人文書院一九七〇・三二八五頁
23 遠藤周作「スキャンダル」四五頁
24 遠藤周作「スキャンダル」五〇頁
25 遠藤周作「スキャンダル」二〇頁
26 遠藤周作「スキャンダル」九五～九六頁
27 S・フロイト　中山元訳「マゾヒズムの経済論的問題」『自我論集』ちくま学芸文庫一九九六・六　二七五頁
28 S・フロイト「自我とエス」　二八五頁
29 遠藤周作「スキャンダル」九六頁
30 このことについては例えば〈マゾヒズムとは自分に向けられたサディズムの延長に他ならない〉（S・フロイト　中山元訳「性理論三篇」『エロス論集』ちくま学芸文庫一九九七・五　六六頁）や〈このサディストという能動性とマゾヒズムという受動性は同一人物のなかに併存している。サディストは、つねに同時にマゾヒストでもある。それらは、性目標倒錯の能動的な面と受動的な面のどちらが強く形成され、どちらが性的な活動の優勢な側面となるかの違いである〉（「性理論三篇」六八頁）などを参照した。
31 遠藤周作「スキャンダル」四一頁
32 S・フロイト「自我とエス」　二八五頁

（九州大学大学院博士後期課程一年）